

第2章 「知・徳・体」のバランスのとれた基礎・基本の徹底

「基礎・基本」の定着

教育基本法・学校教育法の改正により、教育の目標・義務教育の目標が定められるとともに、学力の重要な三つの要素が規定された。

本県では、「基礎・基本」定着状況調査や高等学校学力調査を実施することにより、児童生徒の学力や学習状況を把握し、教育施策に生かしてきた。各学校では、これらの調査を活用し、自校の児童生徒一人一人の状況を把握し、指導内容や指導方法の改善・充実を図ることが大切である。

1 改正教育基本法等を踏まえた、確かな学力の育成

小・中学校学習指導要領（平成29年3月）では、改正教育基本法等で示された教育の理念等を踏まえ、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うことが重要であると示されている。

2 学力調査等の活用

(1) 調査結果に基づいた指導改善

各学校においては、各種学力調査等の趣旨や調査内容等を十分に理解するとともに、調査結果を詳細に分析し、指導内容や指導方法を改善することが必要である。市町教育委員会では、学力調査等を各学校に対する指導や支援に十分活用することが大切である。

分析	<p>① 分析の目的と方法</p> <ul style="list-style-type: none">・ 課題を明らかにするためにどのような分析が必要でどのような方法が適切かを検討する。 <p>② 課題の明確化・焦点化</p> <ul style="list-style-type: none">・ 課題の大きい教科の領域や設問を取り出し、児童生徒のつまずきの傾向を調べる。・ 定着の不十分な児童生徒のつまずきや生活、学習への意識や実態の傾向を調べる。 <p>③ つまずきや課題となっている原因の分析・考察</p> <ul style="list-style-type: none">・ 学習内容の定着状況と学習実態、意識の関係を分析し、考察する。・ 学習内容の定着状況と生活実態の関係を分析し、考察する。
共有	<p>① 分析についての校内研修</p> <ul style="list-style-type: none">・ 調査対象学年を担当する教師や教科担当の教師などの一部の教師だけではなく、全ての教師が分析結果や課題の共通理解を図る校内研修を行う。（ワークショップ型研修等） <p>② 校内研修における指導の見直し</p> <ul style="list-style-type: none">・ 年間指導計画、課題のある領域や単元の指導計画、シラバスなどを見直し、改善案を作成する。・ 児童生徒の生活や学習の実態、意識を改善するための取組案を作成する。・ 指導改善の成果を検証できるように仮説や検証の視点、目標値等を設定する。 <p>③ 分析結果の共有</p> <ul style="list-style-type: none">・ データをグラフ化するなど、分かりやすく理解しやすい方法を工夫する。・ 分析結果は記録に残す。

活用	① 学力の定着・向上のための指導改善
	② 家庭への啓発
	・ 児童生徒の個人のデータを個人面談や家庭訪問の際の資料にする。
	③ 小中連携
	④ 学校評価
⑤ 次年度の学校教育計画の作成	

(2) 報告書の活用

国や県の学力等に関する調査については、各学校がその結果を分析し、その後の指導改善等に役立てることができるよう、出題の趣旨や問題の解説・分析等を掲載した報告書を作成している。

各学校では、それぞれの問題の趣旨を十分理解し、出題の意図や正答の許容範囲、誤答の捉え方などを読み取るとともに、教科調査の結果と児童生徒質問紙調査「教科学習への意識」等の結果との関連についても分析し、指導内容及び方法の工夫改善につなげることが大切である。

その際、文章を記述して解答する問題については、児童生徒がどのように記述していれば正答とみなすのかということ、教師が理解することはもちろん、児童生徒にも理解させることが必要である。そして、準正答に対しては、どのような思考が大切で、どのように解答すれば正答になるのかを、児童生徒と一緒に考えたり、解答の不十分さを再検討したりする場を設定することも有効である。

また、伝える相手を限定したり、字数を制限したり、用語を適切に使わせたりするなど、様々な条件の中で、自分の考えをまとめさせるような指導も大切である。

このような取組は、調査対象の学年だけでなく、学校全体として実施することが大切である。

中学校 理科

まずは、この問題を全員で解いてみましょう。

平成 29 年度タイプB
において課題として
考えられる内容
⑧ (2) 状態変化のグラフ
通過率 16.2%

(2) パルミン酸の量を半分にして実験を行った場合、【結果】のグラフはどうなりますか。最も適切なものを、次のア～エの中から1つ選び、その記号を書きなさい。また、そのグラフを選んだ理由を書きなさい。ただし、パルミン酸の量以外は、すべて同じ条件で実験を行ったものとして扱います。

ア

イ

ウ

エ

(正答の条件)
① 融点が変わらないこと。(「融点」を「固体が溶ける温度」など、同じ意味の言葉で表現していてもよい。)
② 物質が溶け始めて全て溶け終わるまでの時間が半分になること。あるいは、加熱し始めて物質が溶け始めるまでの時間が半分になること。

(正答例)
記号：エ
理由：物質の量が半分になっても融点は変化しないが、パルミン酸が溶け始めて全て溶け終わるまでの時間は半分になるから。

↓

解答類型と割合

自校の数値を入れてみましょう。

解答類型		割合 (%)	自校 (%)
1	○ 記号：エ 理由：(正答の条件)の①、②について書かれている。	8.4	
2	△ 記号：エ 理由：(正答の条件)の時間を「半分」とせず、「短くなる」と表現している。	7.8	
3	× 記号：エ 理由：解答類型1、2以外 または 無解答	13.8	
4	× 記号：ア	15.6	
5	× 記号：イ	37.7	
6	× 記号：ウ	10.7	
9	× 上記以外の解答	0.4	
0	— 無解答	5.5	

※ 「解答類型」の数値は、それぞれ小数点以下第2位で四捨五入して示されており、合算されている通過率や誤答率と誤差が生じる場合があります。

分析と課題

この問題は、「融点は物質によって決まっており、物質が同じであれば、その量が変化しても融点は変わらない」という既習知識と、物質の量が半分になったときに固体が液体になるまでの時間がどうなるかを予想した結果を結び付けて解く問題です。

融点が【結果】と変化していないイまたはエのグラフを選んだ生徒が67.7%おり、「融点は物質によって決まっており、物質が同じであれば、その量が変化しても融点は変わらない」ということについては、おおむね定着していると考えられます。一方で、イのグラフを選んだ割合が37.7%おり、固体の量を変化させても固体が液体になるまでの時間は全く変化しないと考えている生徒が多いことが分かります。授業では、物質の量を変えて固体が全て液体になるまでの時間がどのように変化するかという実験までは行わないため、量を変化させた時のグラフがどうなるかについて生徒は分かっています。しかし、例えば、大きな氷と小さな氷を室内に置いておくと、小さな氷の方が早く溶けるといったことをイメージできれば解ける問題です。

そのため、この問題であれば、最初に行った実験と変わった条件は何なのか、そのために、どのような変化が起こるのかを既習知識や体験から予想する力が必要となります。

授業改善のポイント

- 理科では、仮説を設定する時、既習体験や知識を基に仮説を設定します。日頃の授業で仮説設定の場面を多く取り入れ、目の前の現象と既習知識や体験を結び付けて考えることを経験させましょう。
- 複数の仮説が出ると、どの仮説が正しいかを議論することになり、生徒は既習体験や知識を基に自分の仮説を説明しようとして、そのように複数の仮説を設定できるような課題を設定し、自分の仮説を説明させるような場面を設けましょう。

例1) 課題：ユリは何類に分類されるか
仮説1：葉類が平行脈だから単子葉類だろう
仮説2：花弁が離れているから離弁花だろう

例2) 課題：浮力に関する要素は何か
仮説1：浮いているものを沈める時、大きいものを沈める方が浮力が大きく感じるので体積が関係しているのではないかと
仮説2：深く潜ると浮力が大きく感じるので深さに関係しているのではないかと

解答類型の誤答の傾向から、自校の生徒はどこでつまづいているのか、その解消に向けて、どのような指導の工夫を行ったらよいかを議論しましょう。

3 平成 29 年度「基礎・基本」定着状況調査及び結果の概要

○ 調査期日及び調査対象

調査期日 平成 29 年 6 月 13 日(火)

調査対象 小学校第 5 学年，義務教育学校前期課程第 5 学年，特別支援学校
小学部第 5 学年

中学校第 2 学年，義務教育学校後期課程第 2 学年，中等教育学校
第 2 学年，特別支援学校中学部第 2 学年

○ 教科に関する調査の結果

- ・ タイプ I では，小学校は調査を実施した全教科，中学校は国語，数学，英語で平均通過率が 60%を超えていることから，基礎的・基本的な学習内容はおおむね定着しているが，中学校理科は課題があると考えられる。
- ・ タイプ II では，小学校の算数，中学校の国語で平均通過率が 60%を超えていることから，教科で学習した知識・技能を実生活や学習の様々な場面に活用する力などはおおむね身に付いているが，小学校の国語，理科，中学校の数学，理科，英語は課題があると考えられる。

※タイプ I：教科で身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼすなどの基礎的・基本的な内容

タイプ II：教科で学習した知識・技能を実生活や学習の様々な場面に活用する力などに係る内容

○ 通過率 60%未満の設問（3 問以上ある設問については下位 3 問を示している。）

	タイプ I	タイプ II
小学校国語	<ul style="list-style-type: none"> ■ 叙述を基にした想像（自分の考えの記述） 〈設問 三 5（2）〉 35.9% ■ 叙述を基にした想像（情景） 〈設問 三 5（1）〉 40.4% ■ 文章の構成 〈設問 四 1〉 54.5% 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 情報の取り出し・情報を関係付けた記述 〈設問 五 3 記述〉 32.8% ■ 情報の取り出し 〈設問 五 2〉 43.4% ■ 文章の構成 〈設問 五 3 構成〉 50.8%
小学校算数	<ul style="list-style-type: none"> ■ 平行四辺形の判断 〈設問 7〉 48.3% ■ 一つの式で表す 〈設問 9〉 57.0% 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 二つの折れ線グラフの関連付け 〈設問 10（2）〉 30.7% ■ 事象の解釈と根拠の説明 〈設問 11（3）〉 48.1%
小学校理科	<ul style="list-style-type: none"> ■ 虫眼鏡の使い方 〈設問 5（1）〉 37.8% ■ 並列つなぎの回路のつなぎ方 〈設問 4（1）〉 51.7% ■ 生物のすみか 〈設問 5（3）〉 55.6% 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 適切な検証方法の選択 〈設問 1（2）〉 10.4% ■ 日光を重ねたときのあたたかさ 〈設問 3（1）〉 35.6% ■ 予想の根拠 〈設問 2（1）〉 45.1%
中学校国語	<ul style="list-style-type: none"> ■ 小 3 の漢字の書き 〈設問三 1②〉 30.0% ■ 叙述の仕方の確認 〈設問 四 3〉 34.6% ■ 事象や行為などを表す多様な語句 〈設問 二 1〉 54.3% 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 要旨の把握 〈設問 五 2〉 35.4% ■ 情報の取り出し・伝えたい事実の明確な記述 〈設問 五 4〉 54.5%

	タイプⅠ	タイプⅡ
中学校数学	■自然数の意味 〈設問 3〉 44.2% ■円錐と円柱の体積の関係 〈設問 6〉(1) 48.1% ■最頻値の意味 〈設問 8〉(1) 53.4%	■問題解決の方法の説明 〈設問 12〉(2) 48.4% ■事象の数学的な解釈 〈設問 12〉(1) 54.7% ■事象の解釈と表現 〈設問 11〉(2) 55.4%
中学校理科	■メスシリンダーを用いた固体の 体積のはかり方 〈設問 7〉(2) 20.8% ■融点 〈設問 8〉(1) 36.7% ■鉱物の名称 〈設問 5〉(2) 38.2%	■状態変化のグラフ 〈設問 8〉(2) 16.2% ■砂岩と判断する根拠 〈設問 5〉(3) 17.5% ■地層の広がり方 〈設問 6〉(2) 28.4%
中学校英語	■リスニング問題(英語での問いか けに対する適切な応答) 〈設問 1 2〉 48.7%	■根拠となる英文の読み取り 〈設問 11 1〉 48.4%

参考HP：ホットライン教育ひろしま「平成29年度広島県学力調査報告書」

4 平成29年度全国学力・学習状況調査及び結果の概要

○ 調査期日及び調査実施学校数・調査実施児童生徒数（県内公立学校）

対象期日 平成29年4月18日（火）

調査対象 小学校第6学年・義務教育学校前期課程第6学年・特別支援学校小
 学部第6学年 479校 23,270人

中学校第3学年・義務教育学校後期課程第3学年・中等教育学校第
 3学年・特別支援学校中学部第3学年 241校 21,564人

○ 教科に関する調査の結果

		小学校				中学校			
		国語A	国語B	算数A	算数B	国語A	国語B	数学A	数学B
平均正答率 (%)	本県	77	61	81	47	78	73	64	48
	全国	74.8	57.5	78.6	45.9	77.4	72.2	64.6	48.1

※ 今年度より、都道府県別の教科の平均正答率は、国から、小数点以下を四捨五入した整数値で提供されている。

- 小学校は、全ての教科において、平均正答率が全国平均を上回っている。
- 中学校は、国語については平均正答率が全国平均を上回っているが、数学Aについては全国平均を下回っている。

5 平成 28 年度広島県高等学校学力調査

調査実施日 平成 28 年 11 月 17 日 (木)

調査対象 全公立高等学校 (92 校), 特別支援学校 (6 校) 1・2 年次生

- ・ 国語総合では、通過率 60%以上の生徒の割合が 7 割を超えていることから、基礎的・基本的な学習内容は概ね定着している。
- ・ 数学 I, コミュニケーション英語 I については、通過率 60%以上の生徒の割合が 7 割を下回っていることが課題。
- ・ 数学 I, コミュニケーション英語 I については、通過率 30%未満の生徒の割合が 5%を上回っていることが課題。

分 析

指導の改善

(○:改善・定着, ●:課題)

